

ほほえみ 第53号



4月を迎えて、日に日に陽射しの暖かさを感じますが、皆様、いかがお過ごしでしょうか。毎年、ニュースレターに桜の開花予想を入れているのですが、今年はなんと4月10日ということで、例年にない早い開花予想となっています。開花の一週間後が満開とすると、今年は4月中旬には満開になるのですね。歓迎会シーズンに丁度お花見も重なる感じです。開花が心待ちです。

占い・予言

人間は太古の昔から、占いが大好きで、占い師の方が医師より古い職業かもしれません。テレビや新聞でも、毎日必ず占いのコーナーがありますし、星占い、姓名判断、手相、血液型等、数多くの占いがあります。占う内容としては金運や恋愛運など現実的な内容が多いのですが、血液型占いなどは酒席での話のネタといった部分もあり、他愛のないものかと思えます。

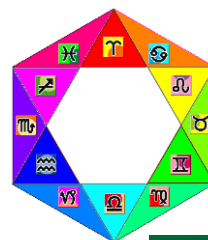
腫瘍内科医をしていると、余命の予測をしてほしいという依頼がたまにありますが、臨床試験の結果と個々の方の余命の予測が別物です（ほほえみ 第32号に書いています）。それと、占うことの危うさのために、特別な事情を除き、こちらからお話することは差し控えています。

現代人は気軽に占うようですが、中世に生きたダンテは、占うことは罪と考えていて、『神曲』を読むと地獄篇の第二十歌に、占い、魔術を事とした者達のが描かれています。神曲の中では、罪に対応した罰を受けるのですが、その罰とは、首だけが後ろ向きになっているため、体は踵の向いた方に、すなわち後ろ向きに歩く・・・となっています。占いで地獄に落ちるといって、現代人としては奇異に感じるかもしれませんね。

ダンテは、何故、占いをかように重い罪と考えたのか？ 矢内原忠雄は、占うということは、正しい努力もなく、現実に真摯に向かい合わないで、安易に占いの示す方に進んでいくことに罪があると考えたようです。ダンテは中世の人間で、宗教的な人格でもあるので、恐らく、神曲の理解としてはそういうことになるのでしょう。

占いで思い出したのですが、中国に『陰騭録』という書物があって、袁了凡という人が書いたものです。この中にも占いの話が出てきます。袁了凡是元々医者を目指していた人でしたが、ある時に、占いの老人に、「あなたは科擧に何番で合格し、どういう生活をし、子供は生まれず、何歳で死ぬ」という風に言われたのです。試しに科擧を受けるとその通りになり、その後は、一言の狂いもなく老人の占った通りに彼の人生が運んで行ったのです。袁了凡是すっかり老人の言葉を信じ、自分の死ぬ歳が何歳ということまで信じ込んで生活していました。

そうしたある日、一見悟った袁了凡是、或る名利に行くのですが、その時、高僧の雲谷禪師に人生に達観した面持ちを感じられ、どのような修行をしたのか聞かれます。そうしてある老人に人生を占ってもらって、それが的中していることを話すと、禪師は「お前は悟ったのではないのか、見損なった。凡人であったか。」と言ったのですね。袁了凡是、単に、占いを信じていただけだと・・・。人生が予め決定されたかのように考えるのは、お前の浅い、幼稚な理解であると言われたのですが、そこで、袁了凡是初めて気が付いて、自分の人生を創造する方向に足を踏み出したのです。

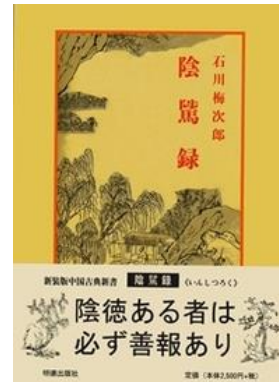


(次ページに続く)

そうして、自分の人生を変えようとしてみると、子供も生まれ、占われたよりも出世し、いままで一言残らず当たっていた予言がどんどん外れていき、当初、老人に言われていた年を過ぎても死ぬこともなく、益々長生きし、円満な生涯を送ったのです。彼は生涯を振り返り、老人の言葉に縛られた人生から解放してくれた雲谷禅師に感謝して、凡人を終えた、終了したということで袁了凡と改名し、『陰騭録』を書き残しました。

私が思うに、占うことが正しくないのは、決定論的な生き方が人間の自由意思に反するからだと思います。人間は死ぬことを決定づけられています、死ぬ運命であるからといって人生に意味がないとしたら、運命に縛られていることになります。運命という言葉は、命を運ぶので前向きですから、むしろ、宿命というべきでしょうか。宿命に縛られている。

ダンテは、人間が自由意思により、神の意志に沿うことを理想として神曲を書いたのですから、神ではなく占いを信じるような宿命論的な生き方を罪としたとも考えてよいのではないかと思います。占いから、神曲、陰騭録、自由意思にまで飛んでしまいましたが、紙面も尽きたのでこのあたりで止めたいと思います。



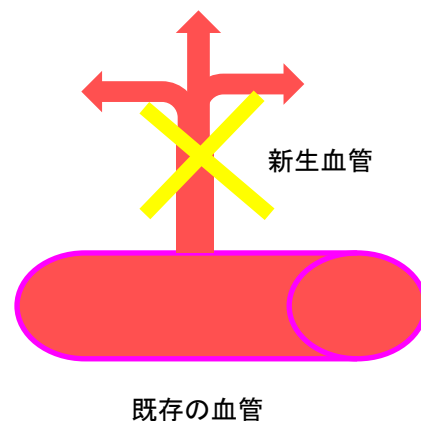
治癒切除不能な進行・再発胃癌に対するラムシルマブの承認に関して

2015年3月26日に、本邦において、治癒切除不能な進行・再発胃癌に対し、ラムシルマブが製造販売承認されました。この薬剤は、血管新生を促進する、VEGF(血管内皮細胞増殖因子)受容体に結合するモノクローナル抗体です。この薬剤を投与すると、新たな血管が作られにくくなり、がん病巣のように、新たに血流を豊富に必要とする組織の増殖を抑えることができるという仕組みになっています。国際的な胃癌の二次治療の臨床試験で有効性が証明され、二次治療で使われる薬剤としての承認になります。

本邦で胃癌で使われるようになる二番目の分子標的薬となります。初めて胃癌で用いられるようになった分子標的薬はトラスツズマブという薬剤ですが、HER2タンパク質の発現が上昇した方に限られるため、トラスツズマブが適応となる方はごく一部でした。今回承認された、ラムシルマブは循環系の障害がないなどの条件付きになる可能性が高いと思いますが、比較的多くの方に使用可能な分子標的薬となると考えられます。

実際に臨床の場面で使われうるためには、薬価収載、流通などのステップが必要なので、概ね一か月程度かかるものと思われれます。現実的にはゴールデン・ウィーク明け辺りになるのではないのでしょうか。

ラムシルマブは血管新生を抑制することで腫瘍の増大を抑制する



MEMO

4月のがん化学療法科の予定

4月10日	桜の開花予想日(盛岡)
4月17日	柴田教授外来 新渡戸稲造記念メディカル・カフェ
4月24日	柴田教授外来
4月29日	昭和の日

